



毎日の詩 2



udauda

目次

今日という	1
含む	2
タイムカプセル	4
抱きまくら	5
重荷	6
呪文	7
果実	8
別人	9
隔離	10
衝動	11
ペン	13
デタラメ	15
教室	16
飽きる	17
ヤケ	18
数学	19
ラジオ	20
想像	21
翻訳	22
盗作	23
卒業	24
美しい言葉	25
リアリティ	26
頭突き	27
流れ	28
引越し	29
雨	30
あのときの言葉	31
夕陽	33
涙	34
月	35
不幸	36

嘘	38
ポケット	39
花火	40
すり傷	41
迷う	42
空回り	43
夜空	44
交代	46
雨言葉	47
育つ	49
名前	50
はかなさ	51
区切り	52
心	53
教え	55
瞳	56
秋色	57
かぼん	59

今日という

今日という

サイコロを振っている

明日出る目を楽しみに

今日という

種を植えている

明日咲く花を楽しみに

今日という

暗号を書いている

明日解きあかす答えを楽しみに

今日という

手を伸ばして肩をたたく

明日の自分に見てもらいたいものがあって

含む

書かれていない

空白まで

含んでの詩

塗る場所の

間違いまで

含んでの絵

写ってしまった

風景まで

含んでの映画

受け取る側の

妄想まで

含んでの作品

作らなきゃよかった

その後悔は

作品に含まれない

タイムカプセル

大切なものは

いつも気づかずに捨てている

時の片隅に

書き捨てた落書きがある

通いなれた遊歩道を

掘り起こすように歩いていく

自分で埋めた覚えがなくても

タイムカプセルは見つかる

抱きまくら

抱きしめることで

振り落とされそうな時にしがみつく

孤独のざわめきを超え

夜の影と和解する

抱きしめることで

抱きしめられている感じがする

わたに柔らかく弾かれて

夢よりも優しいうつつの中で

親でも恋人でも友達でもない誰かに

抱きしめられたい夜がある

抱きしめたまま潜っていきたい

どこまでも深い闇の奥

重荷

人口は増え

情報は増え

爆発的な勢いで

過去は増えている

それはただ

今を生きる者には

重すぎて

僕らはすでに

歴史を

抱えきれなくなってる

こぼしていく

過去は

現在への

違和感になる

呪文

意味のない言葉でも

叫んだらきっと

振り向く人がいるだろう

くすくす笑う人もいるだろう

泣きじゃくる赤ん坊は

心の捉え方を知っている

食べたい触れたい甘えたい

願望を叫びに変えて

言葉は隠せない

言葉が奏でる響きと旋律を

あぶらかたぶら

人は繰り返しつつやく

呪文になるまで

果実

歴史は正義で動かない

たった一本のバナナで動く

自分で動かない植物の

果実や葉っぱや花の蜜が

人を動かす力を持つてる

人は一個のりんごをかじり

一個のりんごをを勝ち取るがため

争いに行く

別人

僕についてる眼と

君についてる眼は違うから

同じ花を見ていても

違うふうに見えるのかもしれない

僕が歩んだ歴史と

君が歩んだ歴史は違うから

同じ人に抱く印象が

全然違ってくるのかもしれない

僕が抱えている心と

君が抱えている心は違うから

僕が信じているあの神様と

君が信じているその神様は

同姓同名の別神かもしれない

隔離

あらゆる偶然を拒絶して

運命の気配を遮断した

薄っぺらい壁を境界線にして

曖昧な自分を守っている

僕は僕を隔離する

僕は独りで一人になる

何もない一点を見つめ続ける

希望の形に見えてくるまで

24時間向き合うのは自分

堂々巡りと知っていても

部屋をカーテンで隠しながら

差し込む光を待っている

衝動

岸壁に

ぶつかりたい

荒波があるんだ

大木を

なぎ倒したい

暴風があるんだ

誰にも

癒やせない

衝動があるんだ

この激情の

居場所は

どこにあるんだ

朝はまだ

見えてきやしない

いくら走っても

ペン

授業中

先生の話聞きながら

ペンを回していた

友達のネタ話を

笑っている間

受験勉強で

机に向かっている間

ペンを回していた

漂う寂しさの中で

過ぎ去る季節の中で

ペンを回していた

ほとぼしる情熱を

吐きだせない苛立ちを抱え

ペンを回していたペンを回していたペンを

回していた

デタラメ

僕が描いたデタラメを

誰か深読みしてくれないかな

面白く解釈してくれないかな

何の考えもなく描いた作品に

誰か共感してくれないかな

胸を打たれてくれないかな

今の人から見れば駄作でも

未来の人から見て名作にはならないかな

ならないかな

自分が描いたもの以上の

見返りを求めたくなるんだ

そしてまた酷いデタラメを描くよ

教室

黒板消しはいたずらに

下敷きはうちわに

ノートは落書きに

教室にあるものは限られているから

新しい使い方を探した

文化祭でわいわい

運動会ですたた

授業中にこそこそ

僕らは探した

誰も発見できてない

新しい学校の使い方

飽きる

批判すれば

偉くなったみたいに

悪口を言えば

正しい側に立ったみたいに

時代という名の

正義を振りかざす

勝者のための敗者を作り出す

僕らは未来をも

消費して使い古す

飽きる速さを

競っている

ヤケ

割れた皿を片付ける

大変さを知っているから

投げつけることなんてできない

壊した関係を修復する

いい術を知らないから

邪険にするなんてできない

どんな苦しい状況になっても

ヤケを起こすなんてできない

明日があるから

数学

全ての数字は答えじゃなく

まだ式の途中かもしれない

何かに足されたり引かれたりするのを

じっと待っているのかもしれない

全ての数字は固形物じゃなく

流動物なのかもしれない

ノートの上で体の中で

まだ計算は続いているのかもしれない

人が作り出した統計を手に

人々は社会問題を論じ合う

神々はその間にも

複雑な方程式を繰り返しているのかもしれない

ラジオ

受験勉強の途中でつけた

深夜のラジオのノリのいい喋り

ついつい止まるシャーペンの動き

ラジオはいつも秘密の匂いがしていた

知らない人と知らないままに

小さなボリュームで繋がっていた

いつもの音楽でフェードアウトするラジオ

朝が近づいてくる不安と寂しさ

掻き消すように眠りについた

想像

内側にある体の循環と

外側にある物質の循環

そのひしめき合いの中で

かろうじて存在している自分

僕の中で育った心が

僕を育てた世界を見上げる

何かがひそかに広がっている

何かがひそかに限られている

宇宙の果て

その向こうにあるものを想像する

心が届くところまで

言葉が届くところまで

翻訳

どんな翻訳家にも

訳しきれない言葉がある

人と人とを隔て

人を多様化させる要素

どんな心理学者にも

訳しきれない心がある

自分と他人の距離を作り

人を個性化させる部分

どんな生物にも

訳しきれない世界がある

世界の受け止め方の違いが

別々の進化に向かわせる

盗作

その目に留まった

風景を描く

その皮膚で感じた

凹凸を掘る

その耳が捉えた

さえずりを詠う

心にぴんときたものを

突き詰めては

突き放し

分解しては

ごちゃ混ぜにし

芸術は世界を

全身で盗む

卒業

心は上の空

校長先生が何か言ってる

急ぐ用事もないのにそわそわ

後輩たちが作った道を歩く

涙する女子となぐさめる女子

握手してうなづく先生と同級生

僕たちの一年は

3月で終わるから

咲き乱れる桜の花が

妙に鮮やかに映るのだろう

卒業証書の筒を開ける音

新しい始まりの合図

思い残すことだらけの校舎を

ぼんやり見上げてさよなら

美しい言葉

それを追っていたつもりが

言葉を追っていた

夢という美しい言葉を

あなたを求めていたつもりが

言葉を求めていた

愛という美しい言葉を

言葉の眩しさに苛まれて

逃げ出した足だけど

まだ何かを追っているような気がするんだ

リアリティ

その一瞬に

抱き損ねた

悲しみが

後を引く

積み重なった

名もなき感情が

怒涛のごとく

押し寄せる

リアリティは

時間が経って

痛感させられるもの

この想いは

引き取る人もいない

僕が抱かねばならぬもの

頭突き

固い壁に頭突きして

苦みを痛みで抑えようとした

じーんと頭に残る響きは

みっともない過去の余韻

忘れられるだけ忘れられたら

大切なものが思い出せるかな

壁の向こうで広がっている

真夜中には響かない感情

流れ

言葉が生まれるまで

心は淀みなく流れていた

血液と同じように

言葉は心の過去にすぎない

去り続ける現在を

がんじがらめにするための

さっさと次に向かおうとした心を

生まれたての言葉が呼び止める

「声にしなくていいのですか」

引越し

生まれた時から

取り残されてる気がする

湿気のこもった下宿にたたずむ

孤独が生んだ言葉は

どれも貧しくて使い物にならない

喉元に積もらせたまま

去れども去れども

取り残されるのは僕の方

分かっている繰り返す引越し

雨

暗い地面に滲む影

体が疼くのは稀

思い浮かばない術

動きかけて停滞している夢

向こうの歩道からの声

僕じゃない人の名を呼ぶ誰？

傘から覗きこんだ上

相変わらず降り続く雨

あのときの言葉

あのときの言葉を

笑顔で言えてたなら

もっと良い意味に

受け取ってもらえたらうに

あのときの言葉を

スムーズに言えてたなら

もっと格好よく

決められていたらうに

言葉が言葉だけで

伝えられたなら

たかが言葉くらいでと

思っていたら

あのときの言葉が

似合う自分だったなら

あのときの言葉に

説得力を持たせられる生き方だったなら

夕陽

薄雲に

見え隠れする

鮮明な赤

なまめかしくて

優しい

誤解を

解きほぐせずに

しこりを残した日

今日の夕陽は

なんだかひりひりして

明日

持っていくべき心を

見つけられない胸は

かすかな夕陽を

いっぱい浴びる

涙

闇に消えゆく今日の寂しさと

姿を魅せる明日への不安

その隙間に涙がぼとり

小さなりビングで落とした涙は

拾ってくれる人もなくこぼれて

カーペットの上で光る

なにか価値あるものに

つなげられなかったとしても

輝かしい涙

月

深まる暗闇が

星の光を浮かべ

この街を静かにした

月明かりに

止まろうとして

宇宙をさまよう虫たち

一杯のビールを

飲み干した後に

気持ちよく漂える夜

不幸

不幸は

現実的に見えてくる

幸福より

感触が強くて

不幸は

使命のように思えてくる

幸福より

意味深に思えて

怖れながら

魅せられている

一人の英雄が抱えていた

不幸話に

失っていく姿に

酔いしれてしまう

大切なものを捨てた時の

後悔を省みずに

嘘

どこで身に着けたのか

その場のしのぎ方を

困難をやり過ごす方法を

ありとあらゆるものが

僕を作ってきた

自分で吐いた嘘でさえも

風呂場の鏡に映った

裸の自分を疑る

何か隠し事はないかと

ポケット

遠い国の戦争は

実感なく記憶を通り過ぎていく

胸を痛めた事件や事故も

今では言葉以上に響かない

たった一人の君でさえ

もう関わりあえない人

何を始めたらいいか

優先順位を見失って

付ける宛てのない手は

結局ポケットに収まるんだ

花火

花火は

一瞬の星

誰も住むことはできない星

私たちの心に住み着く星

花火は

一瞬の川

夜を流れ

宇宙に

溶けていく

花火は

咲きながら散る

花の命を

一瞬で語る

すり傷

どこで付けてきたのか

分からないすり傷がある

どうして付いたのか分からないけど

消えないでいるんだ

ここに

いつ何が起こったのか

分からずにすり傷がある

何と擦れあったのか分からないけど

まだ痛みだすんだ

たまに

迷う

僕らはよく迷う

山にいても

街にいても

それを旅だと思えたら

それを運命と思えたら

迷いもなくなるだろうに

出口を探し続ける

帰りたい家があって

人は迷う

会いたい人がいて

人は迷う

そこに望みがある限り

人は迷う

空回り

真っ直ぐに生きようとするほど

複雑なことからは逃げられなくなるよ

世界を変えるために

あと何枚書類を作ればいい？

想いが募っていくたびに

空回りすることが増えるよ

時を駆け抜けるスピードがほしい

つまずいたことも忘れるくらい

明日を大きく膨らませるほど

今日が煩わしく思えてくるよ

叶わない未来を心に溜めては

ただどうしようもなく願っているんだよ

夜空

気づけば

傍に

光はあった

空を見ていたら

言葉より先に

ため息が出てきた

悲しみでも

安堵でもない

星の瞬きに呼ばれて

闇に溶けた

息は流れ

どこかの命へ向かう

吐き出した体に

そこはかかない

夜が染み込んでくる

交代

眠らなきゃ

始まらない気持ちがある

布団をかけて横になる

暗い空をかけられて

一日はゆっくり葬られる

たくさんの夢に看取られながら

闇の深くで繰り返される

今日と明日の静かな交代

太陽と月が証明する

まどろみの中で

新しい一日の産声を聞いている

それはまるで子守唄のよう

雨言葉

地べたに伝う

雨のつぶやきは

いっせいに落ちれば

賑わいに聞こえる

溝に落ちれば

叫びとなり

川になれば

歌となり

声にならない雨は

水溜りとなり

誰かの足が聞きに来るまで

黙っている

それでも声になれない雨は

言いそびれたように空になって

例え好きな僕を

からかうようにささやいてくる

育つ

種は飛び

誰の庭かまかまわらず育つ

命は紛れ

人に望まれない場所でも生まれてくる

ちょっとした条件に認められて

命はここで生きていく

誰に場違いだと言われても

ここで生きていく

名前

名前の知らない人と

隣り合って

何故だか分からず声をかけられる

名前も知らない人と

話が合って

お酒を飲み交わしたりもする

名前も知らない人に

おごられて

「ごちそうさま」と手を振って

名前も知らない人と

気分よく別れる

名前も知りあわないままに

そんな一日に

名前がついた

はかなさ

夢見る前から

儂くなって

またいつもの朝が始まる

願うことと

叶うこととの距離は

開きすぎていて

何をしてもしなくても同じ

そんな虚しさとの静かな戦い

繰り広げる穏やかな日常

区切り

僕らは一日という単位を作り

そこに自分を囲って暮らす

心のリズムを保てるようにと

僕らは永遠の中に

数え切れないほどの終わりを作る

何度も生まれ変われるようにと

僕らは時間を細かく区切り

乗り越えることに意味を持たせる

常に新しい時間を迎えられるようにと

心

昨日の悲しみが

今日の悲しみを出迎えて

ただぎゅっと抱きしめる

昨日組み立てた論理が

今日の気分と言い争う

その末に

一つの体に同居する

心にはどんなものも

入れてしまえる

心をくぐったものならば

明日来る感情に

僕の過去は

どんなふう語りかけるのだろう

空の向こうに見えるのは

まだ僕の知らない

感情かもしれない

教え

暗闇があるから光を知った

日なたがあるから日陰を知った

代わる代わる変わる世界が

僕に順番に教えてくれた

目を閉じたときにだけ見える景色

耳を塞いだときにだけ聞こえる歌

失って始めて触れられるものがある

瞳

僕に映る

世界は

どんな作品をも

圧倒し

内包する

見上げれば

太陽

見下ろせば

その光で

まばゆい河川敷

目を開き

塗り上げる

瞳が描く

芸術

秋色

秋の深まりは

つまり

終わりでもある

街の色は

嫌がおうにも

落ち着きを取り戻してくる

花は毎年咲き

毎年枯れる

人はその命の行方に

たくさんの想いを重ねてきた

秋色は儚さを呼び

儚さは僕に

秋を気付かせる

心は時に寄り添い

人は自分とよく似た

季節と出逢う

かばん

捨てちゃえば

楽だけど

持ち運ぶ

過去のがらくたが

未来に役立つ

可能性を捨てられず

かばんの中には

ありったけの

僕が詰まっている

電車の中で

深い眠りの中で

旅は続く

毎日の詩2

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
